

本論文は、ロシアの詩人ボリス・パステルナーク（1890-1960）の初期（1910～20年代）に焦点をあて、その詩作と文学的姿勢をロシア革命前後の文芸理論展開の文脈中に位置づけようとしたものである。

論文は序文と結論の他、全5章からなる。

第1章から第3章では19世紀末から1920年代に至るロシア・ソ連における社会思想および文芸理論の展開の中で、文学の社会的役割をめぐる議論がどのように戦わされてきたかが丹念に跡付けられている。第1章は、レーニン、トロツキー、ルナチャルスキーの文学観に即して共産党の文芸政策を分析し、政治的統制の必要性と言論の自由への配慮が複雑に対立しながらも共存していたソ連初期の「過度的」状況を論ずる。第2章は、ソ連時代の文芸論争に対して潜在的に強い影響を及ぼした思想家プレハーノフの革命前の主要著作をとりあげ、芸術が社会生活に対して持つ積極的役割を認める彼の思想的立場が明確にされる。第3章は、アヴァンギャルド系の「レフ」（芸術左翼戦線）および文芸誌『赤い処女地』に依拠した批評家ヴォロンスキーを中心とした「峠」派という、1920年代ソ連の文芸界で突出していた二つの流派を扱う。そして、芸術の社会的功利性を重視した「レフ」に対して、芸術家個人の直感を重視した「峠」派が対比され、パステルナークの創作の背景となる当時の文芸論争の様相が描きだされる。

第4章と第5章は、それまでの文芸論争史を前提としたうえで、初期パステルナークの創作がどのように展開し、同時代の文芸・政治思潮とどのように関わっているかを検討している。第4章はパステルナークの論文「ワッセルマン反応」（1914）を詳細に分析したうえで、「隣接性」「虚量」といったキーワードに即して彼の詩学が解明される。第5章は長篇詩『崇高な病』（1924、改作1928）を取り上げてその詩法や主題を分析し、「室内の詩学」から社会性へ、抒情から叙事へと向かおうとするパステルナークの新局面が分析される。なお、巻末には読解が極めて難しい『崇高な病』（本邦未訳）の原文と試訳が付録として掲載されている。

前半の第1～3章は思想史・文学史的概観の側面が強く、創見が多いとはいえない。一方後半の第4・5章は、20世紀ロシア詩史の中でも最高度に難解な作品を扱っているだけに、語学・詩学上の疑問点が散見され、さらに緻密な読解と注釈の作業が必要と思われる。また前半と後半が必ずしも有機的に噛み合っていないことも、構成上の難点と言える。

しかし、20世紀初頭のロシア・ソ連における文芸論争の展開をこのような形で独自の観点から整理し直したことが重要な文学史的作業であり、さらに初期パステルナークの詩学をその中に位置づけた点はオリジナリティの高い研究成果であり、パステルナーク研究および20世紀ロシア詩学研究への貴重な貢献として評価できる。よって審査委員会は、本論文が博士号を授与されるに相応しい学術的価値を持つものであるとの結論に達した。